

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻139号 平成27年6月1日発行

「修身教授録」探求 (第百三回)

牛に引かれて善光寺詣り

森 信三

掲示板に書いておきましたように今晚から三晩澤木和尚のお話が本田でありますから、通学の人は是非行くが良いでしょう。澤木和尚は私の禅の方のお師匠さんです。なお寄宿舎にいる人は、そのうち近くの勝山通りの南京寺へ来られますから、その時は舎監の先生のお許しをいただいで私が連れて行ってあげましょう。澤木和尚は、諸君がただその面構えを見るだけでも大きな収穫でしょう。あの鬼瓦のような顔を一目見ただけでも、ただの和尚でないことが分かります。

■「牛に引かれて…」の意味

そこで今日は多少これと関連した話をいたしましょう。さて諸君はここに書いた「牛に引かれて善光寺詣り」という諺の意味を知っていますか。これは昔信州の木曾谷に一人の男が住んでいたところ、その男は大の不信心屋で、自分が信仰を持たないばかりか、人の信ずることさえ盛んに悪口を言ったり邪魔したりしていました。ところがある日のこと、その男の干しておいた布をどこから来たのか一匹の大きな黒牛が現れて、角に引っ掛けてどんどん走り出したのです。そこでこれを見たその男は「これはたまらぬ」と思ってどんどん牛を追っかけて駆け出し

ました。ところがその男が追っかければ追っかけるだけ牛の方もどんどん走る。時には布が手にすれすれになるところまで近づくこともありましたけれど、どうしても捉えることができない。追っかければ追っかけるほどますます駆けて行く。こうしてまる三日というものを牛を追っかけて行ったところ、とうとう牛が止まったので「ヤレヤレ」と思っで見ると、自分はいつしか善光寺の境内に入っていたと言います。同時に「ハッ」と思っしてみれば、今の今まで自分が追っかけてきた黒牛の姿は掻き消すように消えて、ただ一筋のさらしのみが目の前の敷石の上に白々と横たわっているのです。そこでその男も初めてあの牛はただの牛ではなくて、この不信心な自分をこまでお呼び寄せになるために遣わされた善光寺様のお使いであったということが分かったと言います。同時に長年の「我」の角^{かど}が取れて、それから深い信心の人になったということでもあります。

■ある縁が…

さて以上の話は既に諸君も小さい頃からお母さんなりお婆さんなりから聞かされた人が多かろうと思えます。もちろんこの話が本当にあったことや、誰かが作った話やらそれは私には分かりませんが、しかしそうした事はどちらでもよいことでありまして、大事なものはこの話の中に

宿っている道理のもつ意味味わいでありまして、それについて私は深く感動する者であります。すなわちこの話の中には多くの人間が：そうしてそれは必ずしも優れた人ではなく、私どものように愚かなくせになかなか強情傲慢な人間が、いろいろの縁に催されてついに心の目の開けるにいたるところの道行きが、実に鮮やかに物語られていることに驚かざるを得ないのであります。いやさらに一歩進めて申せば、余人はいざ知らず少なくとも私自身の過去の姿がこの一つの話の中に象徴されていると思うのであります。かくして私からすればその男とは他人事ではなく、いわんや遠い昔の信州の話などではなくて、実に過ぎる十数年間における私自身の姿と申してよいのであります。

■澤木和尚とのなれそめ

そこで先ほど澤木和尚の話の聞きに行くようにお奨めした関係上、私がどうして和尚を知るに至ったかの一端を申してみましよう。それがやがてまた私の過去が、先ほど申した牛に引かれて善光寺詣りをした男と同様であったということをお話することともなるからであります。そもそも私が初めて澤木和尚の名を聞いたのは、私が京都大学に入って早々のことでした。私に和尚の事を話して、ぜひ和尚の話の聞きに行くようにと勧めてく

れたのは、かねて高等学校時代から和尚のお弟子であった友人でした。ところが当の私は、なんだかんだと口実を設けて結局最初の時は行かなかったのであります。当時和尚は熊本の郊外の桃畑に居て、春秋二回五高出身の有縁の学生を主として、はるばる九州から上って来て東京まで行かれるのでした。そうして私が初めて奨められたのは入学早々のことでしたから春の会だったわけです。しかるにそのうちやがて秋になってまた和尚がやってこられたので、先の友人が今度こそ是非にと奨めてやまないのです。そこでさすがの私も友人の手前義理にも断るわけにゆきかねて、大して心がすすんだわけではありませんでした。とにかく行って聞いてみることにしたのです。

さてその最初の時に受けた私の感じは、ずいぶん変わったお坊さんだという印象を受けました。が、しかしまさかこの方が我が国の曹洞宗そうとうしゅうにおいて、かけがえのない傑物であるうとまでは思わなかったのであります。しかしそれもそのはずでありまして、当時の私はその程度のものでしかなかったのです。第一それまでが禅宗のお坊さんなどというものには只の一人も逢ったことがなかったのです。しかし不思議なもので、それからというものはや単なるお義理ではなくて、和尚の来られる毎に進んで聞きにい

くようになり、さらには和尚の来られる2のを相当前から心待ちするようにもなってきました。そうこうしているうちに、それまで和尚の世話をしていた友人の草場弘君が東京に去り、そのあとをお世話しておられた京大の国文学の教授の澤瀉先生のお宅に御病人があったりして、とうとう私の宅でお世話を申すようなことにもなったのであります。しかし愚かな私には、それでもなお澤木和尚が我が国曹洞禅の真精神を今日に伝える唯一掛け替えないお方だということがはつきり分かるには、その後なお数年の歳月を要したのであります。結局最初にお会い申してから七、八年経った後のことでもあります。そのことはさらに私の終生の恩師である西晋一郎先生の場合についてもほぼ同様でありまして、先生の真のお偉さ

■初めからのめり込むことなし

以上は私の恥話ちわであり全くの懺悔ざんげではありませんが、それを敢えて諸君の前へさらけ出したのは、優れた方は別でしょうが、まず私如き平凡な人間の場合には、決して初めから真剣な求道心は起こり得なかったという事を申すわけでありませぬ。同

時にまた我が眼前に、我が国においてその道で掛け替えない優れた方に接していながら、その方の真のお偉さがわかるには、大抵八年ないし十年近い歳月を要してきたということであります。もちろんこれは私のような愚かな者を標準にした話でありますから、素質の優れた人も同様にみなす事は出来ないでしょう。現に梅尾の明恵上人の如きは、わずか三十四歳にしてすでに宗教心の芽生えがあり、青年時代に至っては自ら耳を切つて誘惑を退けておられるほどに傑れた方でありました。しかし斯様なお方はいわば古今の精神的人傑でありまして、いま我々如き者は、初めて友人に対する義理とかなんとかそうした事どもを縁として、少しずつ精神の世界に引き込まれていくもののようにあります。

そうしたわけで、私としては何卒して今日の和尚のお話を諸君に聞きに行つてもらいたいのであります。つまり私に対する義理としてでもよろしいですからぜひ聴いていただきたいのです。そうして五年八年と続けているうちには、なるほどと思ひ当たることもありましょう。

■自分の目と耳で：

なおついでですが、一人の優れた方の方の値打ちを知るには、第一段階としてはその方が現在日本においてその専門の領域においていかなる地位を占めてお

られるかということ、単なる世評としてでなくてわが身をぶちつけて知ることです。これが本当にわかれば一応まずその方を知ったといえましょう。が更に一歩を進めれば、次にはその方が我が国のその道の歴史の上でいかなる位置を占める方かということの見当のつき始めることとあります。しかしこれはなかなか容易なことではありません。またうっかりするととんだ間違いをする危険もあります。しかし本当のことを申せばこの点がある程度までわからないことには、その方に対する尊敬と言つてみたところで真に徹したものは言えないと思ひます。(橋本博記)

■雑話

明恵上人については村上素道師の「梅尾の明恵上人」という本があります。気をつけていると古本で出ますから読んで「らんなきい。日本仏教史上での傑僧の一人です。

次にガラス窓を閉める時は静かにしなければなりません。すべて物事を静かにすることを力の無いように考えるのは外から眺めてのことであつて、実際にやる人は緊張していなくては静かには出きるものではありません。

同様に廊下や階段を音を立てないように歩くこと。自分は他の修行はともよしないが、廊下や階段を音を立てないように歩くことだけは守ってみようと決心した人

は、それだけでもどこか違つて見えましよう。人間只の一事だけでも一生を貫いて守り通せばひとかどの人間になれます。もつともそれを人に話す事は禁物ですが……。ここに学校教師の悲劇があります。本来なら他人に語るべからざる斯様な修養上の工夫を、他人に向かつて公開しなければならぬとは人生の一悲惨事です。そうしてそれがお互い学校教師という者の運命です。(修身教授録第三巻昭和18年9月 同志同行社刊)

日本民族が担ったもの(微言)

森信三

○「彼らを赦せ、彼らは知らざるなり」とは聖者の示す最深の真理の一つである。
 ○「汝自身を知れ」というデルフォイの神殿に刻まれた一語は人類永遠の真理である。ただ今爾大戦まではその個人的妥当のみが考えられて来たが、今爾大戦はその国家民族への妥当を教え初めたといつてよい。そしてその最初の開眼が今や我らの民族によつて行われつつある。
 ○人類の歴史上未だかつて行われなかつたことを始めたものは……これが善事であれば史上最大の恩寵を受けるべく、もしまたそれが悪事であつた場合には、人類最深の神の審判を受けるであろう。
 ○対流回流は神意の物界における顕現である。
 ○俑という文字を生み出した漢民族は卓

れた歴史的認識をもつ民族と言わねばならぬ。

○最も聡明なるものも自己を客観視することは困難である。そして主体が個人から国家へと移行するとき、その困難は飛躍的に次元を増す。

○神の審判という思想を我らの土俗は古来「天に唾するもの……」という俚諺の形で把握してきた。

○「汝の敵を赦せ」という真理の表現形式と「恩讐の彼方に」という表現形式と。人類は今や改めて同一真理に関する積極消極の二種の表現形式のもつ二重の長短得失について審思しなければならぬ時期に到達した。

○勝敗といふことに對する根本反省を古来いづれの民族が最も深刻に為したと言えるであらうか。敗者に於いてまた勝者において……。

○真の反省とは、自らの立つ立場そのものに対して根本的にメスを入れることになければならぬ。しからざればそれを反省と言っても単に自慰的堂々巡りのなものに過ぎない。しかもこのことの現実には如何に至難なことであるか。特に国家民族を主体とする場合において……。

○神の審判に終期はない。

○自らのうちに悪の潜在している知ることの困難さは個人主体の場合の方が遙かに大である。

○他を戒めんとする者は自己もまた戒め

るべきことを知らねばならぬ。個人としてもまた民族としても……。

○法律的不法は法が審くが法を超えた不法は神これを裁き給う。

○人類史上真の暗黒時代と称せられるべきものは果していつの時代であらうか。それが中世であるか現在であるかはたまた未来であるかは神のみか知り給ふところであらう。

○神と文明とは等しくない。

○以前になかりしものを与えたと思つても、前にはあつて今はなくなつたものがある場合がある。しかしこれに気づくことは容易ではない。そうしてこれを妨げるものは、個人であればたまた民族であれば畢、竟するに我執に他ならない。

○真に相手を責める資格のあるのは、自らもかつて同種の過ちを犯さなかつたばかりでなく、将来といえども犯すことなきことが確実でなければならぬ。

○神は一部の人間の意志と意図とを蹂躪してその御心を為し給う。

○人類の宿業について憐れみかつ審き給うもの……それは只神のみである。

(「開頭 20号 昭和23年11月」)

あとがきに替えて

今回の「微言」は初めての掲載である。日本民族が敗戦後、森信三先生が言われるような深い反省の途を歩んできたとは愚生は首肯しがたい。そこまで民族は学んではないと思うのだ。この論考は敗者も勝者も嘔みしめ

るべきものであるが……。安倍政権はただいま新しい「こ」とば」を世界に発信すべく腐心している、が世界を納得し得る文言作成は至難中の至難。世界も森信三先生の考究の深さに至つてはいない。遅延として人類の歩みは続くだろうが樂觀は禁物。国家と国家の存続は話し合いのみで解決されたとは言いがたい。どこかにきな臭い地域と指導者がいる。「備」という文字を森信三先生は取り上げておられる。このことの意味が愚生には分からない。(27日二繁)

第151回「かよう会」のご案内

日時 平成27年6月16日(火)
18時00分～(毎月第三火曜日原則)
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686
交通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円(大きな書店で購入)

6/16教育と礼
7/21敬について
8/18ねばり

参加費 1000円

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

電話0744-4513422

Email:hij3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn